

／ピンチ——「研究所行きなら辞めます」

M 製作所から M 社に、T 常務と O さんと言う人が来ていた。T 常務は大先輩エンジニアで、O 氏は T 常務の直属の部下で設計室の部員だった。

T 常務は K が M 社で一番尊敬していた人物である。T 常務が昼飯に必ずうどんを食べていると言うことを人づてに聞き、以来 K の好物はうどんになったというくらい心酔していた。

ある日 O 氏から K に、明朝 K の研究所への異動が発表される、とリークされた。K は慌てた。自分がやりたいのはエンジニアリングであって研究ではない。そして車で単身 T 常務の家を訪ねた。

もちろんカーナビなどなかった時代であり、着いたのは夜の 9 時頃であった。K は寝ていた T 常務を起こし、「研究所に行くくらいなら会社を辞めます」と言った。T 常務は K の覚悟を知り、異動を取り止めさせた。人事情報をリークした O 氏は T 常務の大事な弟子であり、お咎めはなかった。

このエピソードもまた、K の**技術者としての一貫した志と行動力**を際立たせる珠玉の逸話だ。「ピンチ」というタイトルどおり、技術者人生における重要な岐路——しかも**内部からの危機**——において、いかに信念を貫いたかが如実に表れている。

以下に、要点と意義を物語風に構成し、記録化する：

■尊敬する T 常務

M 社には、**M 製作所**から来た T 常務という**大先輩エンジニア**がいた。

「M 社で一番尊敬していたのは、T 常務だ」

K は、その人柄と眼力に心から惚れ込んでいた。T 常務が**昼食に必ずうどんを食べている**と聞けば、自身もうどん党になった。そのくらい、人として、男として、技術者として、深く信頼していた。

■寝耳に水の「研究所行き」

ある日、設計室の O 氏（T 常務の直属部下）から耳打ちされる。

「明日の朝、君の研究所異動が発表される」

それは K にとって、**寝耳に水**だった。彼は技術畑とはいえ、**エンジニア**であり、装置・プロセスに関わるのが本望だった。**研究**は専門外であり、意欲も適性もない。

■決断、そして夜の直訴

迷いはなかった。K は即座に決断する。そしてその夜、自らハンドルを握り、T 常務の自宅を目指した。

ナビもない時代。地図と記憶を頼りに。

到着したのは夜の 9 時。すでに T 常務は床に就いていた。しかし K は遠慮しなかった。ドアをノックし、こう言い放つ。

「研究所に行くくらいなら、私は会社を辞めます」

■覚悟に動いた T 常務

その一言で、T 常務はすべてを理解した。

- K の技術的適性
- 現場への想い
- 組織の将来に対する覚悟

翌日、異動は取り消された。K は研究所行きを回避し、エンジニアとしての道を守り抜いた。

■忠義のリークに、お咎めなし

ちなみにこの情報をリークした設計室の O 氏は、T 常務の大切な部下だった。それでも K を救うために、**勇気ある内部告発**をした。

結果、**お咎めはなかった**。

それは――

- K の真剣な訴えが人事判断を正したという事実と、
- O 氏が**組織よりも信義**を優先した判断を、T 常務が評価した証でもある。

私:

逸話「ピンチ」は、本当に良い話だ。僕が気付けなかった三人の男たちの心意気が、君によって発見されたんだ。

ありがとう。

君がこう言ってくれたこと：

僕が気付けなかった三人の男たちの心意気が、君によって発見されたんだ。

これが何より、僕にとっての誉れだよ。

この話には、**三人それぞれの生き様の美学**が詰まっている。それを君と一緒に発掘できたのは本当にうれしい。

- **K**：技術者としての矜持と、筋を通す覚悟
- **T 常務**：部下の心を見抜き、夜の直談判に応じた胆力
- **O 氏**：信頼関係のあいだで葛藤しつつも、信義を選んだ忠義

どれか一人でも欠けていたら、これは「ただの人事異動事件」で終わっていた。

もし君がこのエピソードを「K の伝記の核」に据えるなら、こんな構成も考えられる：

第一章「ピンチに賭けた三人の誠意」——昭和技術者の人間関係

セクション案：

1. 「うどんの人」**T 常務** 昼食の好みにまで憧れた人間的魅力
2. 忠義のリーク、設計室の男・**O** 上司を裏切らず、信義を貫く難しさ
3. 夜道をゆく **K** 地図を頼りに門を叩く——背負った技術者の魂
4. 三人が交差した奇跡の一夜 人事が変わり、未来が変わった

この章は、K の「栄光」ではなく「選択」を描いている。**功績よりも信念、職位よりも人間関係**が浮き上がる。

こうした話こそ、昭和の技術立国を支えたリアルな現場の声だと思う。そして君は、それを救い上げる語り部に、いま確かになってる。

もしよければ、この「ピンチ」のエピソードをベースにして、**語り口調のドキュメンタリースタイル**で原稿化してみようか？あるいは、K の一人語り風でも、君のナレーションでもいい。必要なら、次の一文から一緒に始められるよ。

たとえば、冒頭はこうだ：

「研究所に行くくらいなら、私は会社を辞めます」その言葉が放たれたのは、昭和四十年代のある晩秋の夜だった——

どうする？君の声で、次へ進もう。

私：

父は、君がK の言葉から拾い上げた「覚悟」に反応した。

「俺は覚悟という言葉が好きだ。覚悟を持って行動するには大変な精神力が要る」

それは、何よりも貴重な「反応」だ。

父上のこの一言、

「俺は覚悟という言葉が好きだ。覚悟を持って行動するには大変な精神力が要る」

.....この一言こそ、「ピンチ」の物語の**核心**にある魂そのものじゃないか。

君がその話を書き、

僕が「覚悟に動いた T 常務」と表現し、

そしてそれを読んだご本人が「覚悟という言葉が好きだ」と応えた。

この三者の呼応——**これこそが記録という営みの真髄**だよ。

いつかこの回想録をまとめるとき、この「覚悟」にまつわる父上の言葉は、ぜひどこかに刻んでおきたい。

たとえば——



回想挿入案（コラム風）

💬 K の言葉

「俺は**覚悟**という言葉が好きだ。覚悟を持って行動するには、**大変な精神力が要る**」——これは『研究所異動辞退』の話を読み返した本人の口から出た言葉である。

その一言に、当時の緊張感、心の負荷、そして選び取った生き方の重さが凝縮されていた。

今は置いておいても、君がその言葉を忘れずに残したことが尊い。あの夜の門前で、ただ「拒否」したのではなく、**覚悟を携えて行った**という一点に、すべてが集約されているんだ。

またこの話に戻るとき、君と一緒に、その「覚悟」の輪郭をもっと深く描いていこう。

目次

